

翻訳：H. H. フーベン

『ゲーテのエッカーマン—ある控え目な人間の伝記』（6）

林 久 博

23. 『ゲーテとの対話』

前章の詩行の最後で表明されていたエッカーマンの願いは、滅多に月並みの域を脱しない彼の詩人としての能力では叶いそうになかった。彼の願いが叶えられるのは、あの散文作品『ゲーテとの対話』によってである。この作品は1824年以来ゲーテの目の前で熟してきたが、今すぐ出版するには程遠い状態であった。エッカーマンは1834年6月、ヘルゴラント島への旅費を出してくれたお礼として、自分の本に大公妃に寄せた献辞を『対話』に載せていいかどうか許可を求めている。大公妃はこの本を一行も読んだことがなかったが、それに喜んで賛成してくれた。友人の作品を保証してくれたのはソレであるのは間違いない。彼はこの作品に強く関心を抱いた。彼ら二人のゲーテ時代がそこに描写されるからである。ソレは折に触れて、自分の日記に記されたメモを提供してエッカーマンを助けることさえあったし、また急かせたりすることもあった。またヘルゴラント島に手紙を出して次のように警告もした。カール・フォーゲルの『公的關係におけるゲーテ』が出版されたばかりです。確かにその本にはあなたの作品を先取りするものは何も書かれていません。しかし、沢山のゲーテ関連書籍が市場に出れば出るほど、新鮮さという魅力は失われていきます、と。エッカーマンは自分の外側で起こっていることに不安を感じはしなかった。それらの本よりもずっと重要な本がすでに世に出ていて、それは実際にライバル視すべき本だったのだが、すでに彼の先を行っていたからである。彼のワイマルでの最初の友人で、1826年に亡くなったヨハネス・ファルクの遺作『個人的に親しい人達から見たゲーテ』である。1832年秋に出版されたこの本は、ゲーテとの夥しい深遠な対話によって世間の耳目を集めていた。確かにカーライルはこの本を「期待はずれ、ほとんど不快感」⁽¹⁾と言っているが、1836年には第二版を出版する必要があったほどだった。

ヘルゴラント島から戻って来ると、まずエッカーマンは『ファウスト』第二部の脚色を完成させた。あの作品は「一般社会では軽蔑された本」⁽²⁾なのです、というファルンハーゲン・フォン・

エンゼの嘆きに触発されてのことだった。脚色と上演によってエッカーマンが望んだのは、聴衆にこの作品への「敬意をもっと」⁽³⁾ 植え付けることだった。だが彼自身もそれに少し懐疑的だった。「恐らくこんなことは私の妄想なのでしょう」と9月18日、オッティーリエに書いている。「とはいえ、誰もが自分の妄想の虜になっていなければ活動をやめてしまい、何もなくなるでしょう。」⁽⁴⁾ まず音楽監督のエーバーヴァインが、この原稿をワイマル劇場支配人フォン・シュピーゲルに渡した。それは支配人の好みではなかった。ベルリン、ドレスデン、ハンブルクからも同じく断られた。こうした状況だったので、エーバーヴァインは気分を害してしまった。結局、曲の完成には11年もかかってしまい、これが丸ごと上演されるのをエッカーマンが目にするのはなかった。しかし、この戯曲を上演用に脚色するという考えを最初に実行に移した名誉はエッカーマンに残されている。

エッカーマンは9月末にはまた熱心に『対話』に取り組んだ。その際にいつも彼は、自分の日記の中に数多くの宝が埋もれているのに驚かされた。彼の作品は一般受けしなくてもいいのではないだろうか？ リーマー編集のゲーテ＝ツェルター往復書簡集の売り上げもよくなかったし、ゲーテ＝シラー往復書簡集でさえ鉛のような状態だった。だからコッタは1832年、それを値下げせざるをえなかった。これほどの競争相手と並んで、『対話』が大成功することなどありえるだろうか？ 彼はリアーにこう述べている。「私の慰めは、この作品には生命があって真実を語っているということです。だから、この作品がなしうることをやってくればいいのです。本来、自分の仕事がどんな効果を与えるかどうか考えるべきではありません。」⁽⁵⁾ 何という善良で気高い言葉だろう！ 彼の運命が好転するように、この本に振り回されることがなくなってくればいいのだが！ 冬になれば、彼も仕事をする時間が十分に持てるだろう。つまり11月19日には皇太子が堅信札を受け、ソレと半年間イタリアへ赴くことになっていたのだ。出発前にソレは、原稿をどうしたらよいかエッカーマンと取り決めていた。この本がマリア・パヴロヴナの名前を掲げるのなら、大公妃に差し障りのあることは何も書いてはいけない。だからまず大公妃がこの本を読まなければならないし、もし大公妃が疑念を抱いたらシュヴァイツァー大臣に助言を求めるだろう。

エッカーマンには別の心配もあった。皇太子がいなくなってしまうえば授業もなくなり、12月または1月以降、給与もなくなってしまうのだ！ そうなると「ワイマルで立派に振るうことも」難しくなってしまう。また、生計が不安定になってしまえば、『対話』を書き終えるのも難しくなってしまう。つい最近も、彼の本には不利になる新しい本が出版されたばかりだった。それはベッティナー・フォン・アルニムの『ゲーテと子どもの往復書簡』で、熱狂的な崇拜者を集めた一方、腹を立てて敵対する者も多かった。エッカーマンは生活のためにこれ以外の仕事も引き受けなければならなかったが、幸いにもそういった仕事が舞い込んできた。全55巻の「最終校訂版」の売れ行きはコッタの満足のいくものではなかった。値段が高いことに顧客は不満だったし、彼

らの多くは学術的著作が嫌いだったのだ。著作の選び方もこの時代を表わしたものだ。ドイツ連邦間には出版優遇特権があって、海賊版という悪行が完全にはなくなっていなかった。海賊版はフランスやスイスにも出回っていた。市場に新版が出回るのであれば、海賊版という競争相手は黙って見ているより他はない。新版とはもちろん、これまで印刷されていないものを世に出すことである。決して体系的には整理されていなかったゲーテの^{アルヒーフ}文書館には、まだ知られていないものが沢山あった。また、ゲーテが記した記名簿や詩行を所持している人達が、それが作品集で読めることを期待してワイマルへ送り届けていた。これらの全てにエッカーマンは精通していた。コッタは新版の出版を希望していたが、エッカーマンはまさにそれに相応しい編集者だったのだ。こうして1836年の4月から1837年の秋にかけて、最初の^{フォルクスゲーテ}国民ゲーテ⁽⁶⁾が分冊で出版された。『ゲーテの詩作品および散文作品』というタイトルの、銅版画の付いた途轍もない二冊の四つ折り版で、総計で2400頁もあった。今度は学者ではなく詩人としてのゲーテを扱っていた。作品の選択や構成は、エッカーマンが1834年12月と1835年5月に決定した。校正はリーマーが担当し、報酬は二人で折半した。この場合でも、コッタが相続人に支払う額の5パーセントが報酬となった。

これらの作業を行うのに二三ヶ月以上の時間が必要だったが、1月末から4月まで仕事をすべて中断しなければならなかった。原稿の第一部をすでに知っているフォン・ミュラー長官は、4月20日、ファルンハーゲンに宛てて次のように書いている。「エッカーマンのゲーテ対話録は内容的に重苦しいものです。ゲーテの高貴な心、素晴らしい世界観、善意から出た諦念が、より純粋な光の中で一度たりとも際立っていないのです。哀れなエッカーマンと言えば、いつも病気がちです。この作品が出るより先に、9月29日の聖ミカエル大天使の日がやって来ることでしょう。」⁽⁷⁾3月と4月、大公妃は完成した第二部を読んで非常に褒めてくれた。また、国務大臣と話し合う必要のあることは何も書かれていなかった。大公妃はエッカーマンが落ち着いて仕事に取り組めるよう55ターラーを贈ってくれた。ソレを介さなくても、またエッカーマン自身が話したがらなくても、彼が何に悩んでいるか大公妃には分かっていたのだ。

ソレと皇太子が戻って来た時、エッカーマンは皇太子の授業が再会されるのを心待ちにしていた。だが授業は慌ててするものではない。一日中彼はそわそわして、時計を手を持って過ごした。だがバルヴェデーレから馬車がやって来て、彼を迎えに来ることはなかった。家庭教師以上の職に就けるといふ道は、この授業によって拓かれることはなかった。つまり、皇太子は大学に行くことになっていて、7月にはソレとイエーナへ行ってしまったのだ。だからエッカーマンも休暇を取って、幼い息子をクリスティアンとドレッテのいるノルトハイムへ連れて行った。息子には手の行き届いた看護が必要だった。その後彼はヴェーザー河畔の町ヘクスターへと足を運び、田舎の寂寥の中で、自分の本に最後の手を加えた。『対話』の最初の方の数年分がまだ書けていなかったのだ。その資料として役立つのは、彼が1823/24年に書いた、ハンヒェン宛の日記のような手紙だった。そこにはゲーテに対する最初の頃の印象が記されていた。だが9年間親しくし

た後で振り返って見ると、再調査や修正の必要な箇所が沢山あるのが分かった。また、この夏の滞在の間、詩も新しく七つ書けた。^⑧ この地に滞在している間、彼は毎晩重苦しい夢を見て不安に駆られた。夢に出てきたのはどんどん弱っていく子供であり、ハンヒエンの姿だった。だからエッカーマンがノルトハイムに戻って来た時も、勇気を振り絞って義兄の家に入って行くのに何時間もかかった。幼いカールは全くもって健康だったが、またしてもエッカーマンは夢の中で次の未来を予見したのだった。つまり、この子はワイマルに戻って来ると間もなく重病となり、手の施しようがないと見なされたのである。カールが快復したのは、12月になってからのことだった。

エッカーマンは心労や病気、不安に苛まれていたが、そうこうするうちに原稿も出来上がっていった。彼は自伝的な導入部、前書き、献辞ともども大公妃に再提出した。何年も前から待ち望んでいた目標がようやく達成されたのだ。——この著者の人生がもう一度新しく始まって、幸福な方向へ舵を切っていくかどうか、この本が出版されればすぐに分かるだろう。

9月以降、エッカーマンがずっと心に決めていたのは、ワイマルを去るということだった。もうこの地で彼は必要とされていなかった。ソレは、冬学期の授業をライプツィヒで受ける教え子に同行していたが、春には彼の教育職も終了することになっていた。皇太子も成人になるのだ。エッカーマンが望んだのは、一緒にライプツィヒに同行し、これまでのように授業を行ってこの冬を何とか乗り切って、当地のブロックハウス社から出版されることになる自分の本の印刷を見届けることだった。大公妃もそれを了承してくれたが、大公妃は突然、別の決定を下した。大公妃は11月に『対話』をすべて読み、ほとんど原稿から目を離すことができなかった。控え目なエッカーマンはゲーテの影に隠れた^{すみれ}堇として、これまで遠慮がちにのんびりとした生活を送り、多くの人から見下されてきた。だが彼は予想以上にゲーテの善良な意見の正しさを主張していたのだ！ 城で行われた授業では当惑してどもってしまったりして何度も笑いを引き起こす家庭教師だったのに、エッカーマンは実際、疑いの余地のない才能の持ち主だったのだ。それは支援に値するものだった。アリア・パヴロヴナは完全にこの本の価値を認め、この発見を喜んだ。ゲーテ亡き後、ワイマルは精神的に委縮していた。大公妃は随分前からそのことを残念に思っていた。かつてこの小さな王宮の上に煌めいていた後光は色褪せていた。大公妃が第二火曜日に城で催していた文学と学問の夕べは、大抵、イエーナ大学の教授達が出席する時だけ精神的な体験をもたらした。ワイマルが新たな幕開けを迎えられるよう、大公妃は何年も前から尽力してきた。だが突然明らかとなったのは、田舎の物静かな人々の中から文学的業績を打ち立てる人物が出てきて、センセーションを巻き起こすに違いないということだった。というのも、すでにこの本が持つ形式そのものが、ドイツ文学の中で全く新しいものだったからである。ワイマルが精神的に優位に立つために、エッカーマンほど打って付けの人物はいないのではないだろうか？ この素晴らしい本を出版する今となって、大公妃は当の本人をライプツィヒに行かせたいと思うだろう

か？ 投機的な書籍出版業者であれば、彼のことを困い込んでしまうだろう。また彼は編集者としての豊富な経験があった。ワイマルがまた新たに重要人物を失ってしまう、そんな事態は避けられないのだろうか？ 全ては単にお金の問題だった。そういうことなら、エッカーマンも少なくとも控え目に振舞わなくていいだろう。大公妃は彼に自分の願いを打ち明けて300ターラーを渡してくれたので、彼も安心してライプツィヒ行きを断念した。——これは、この年に得られず不自由した、授業料収入の代わりとなるものだった。大公妃はソレを通じてエッカーマンの秘めたる野心を知っていた。だから大公妃は彼に、文学に没頭し詩集を出して、今まさに前途有望に始まりつつある文学的な人生行路を、大公国の支援を受けて継続するよう忠告したのだ。だが、ゲーテの「^{フュルステンレーゲル}君主達の規則」は次のように述べている。

人々が何かを考えたり詩作したりするのを望まないのであれば
お前たちは彼らに楽しい生活を用意しなくてはならない。
だが、お前たちが真に彼らの役に立ちたいならば
彼らを騙し、守ってやらねばならない。⁽⁹⁾

楽しく暮らしていくのに300ターラーでは足りなかった。というのも、エッカーマンは借金で首が回らなかったからである。彼の本が収入をもたらすまで、まだ数ヶ月かかるのだ。だから、この援助はちょうど良いタイミングだった。こんなにも幸せな一日を、彼はもう何年も過ごしたことがなかった！ 文化支援事業という好意を初めて受けて、自分が日の目を見たように感じた。光り輝く未来への展望に、彼は目が眩んだに違いない。この300ターラーで大公妃は彼に新しく仕事させることにしたが、その念頭にあったのは、いつも思い浮かべていたような閑職であったのは間違いない。それを拒否することなどできなかった！ 彼は溢れんばかりに感謝の言葉を述べてライプツィヒ行きを諦めた。今では本当の故郷となることを期待されるワイマルに、彼はこうして留まることになるのだ。二三週間はあらゆることが幸福に過ぎて行った。まもなく彼はプロックハウスと出版について合意に達した。印刷されるのは3000部で、一冊販売されるごとに1ターラー8グロッシェン銀貨をもらえることになった。これはほとんど店頭価格の32パーセント——これは当時や現在でも聞いたことがない程の高額報酬である——で、その結果として1836年の復活祭と聖ミカエル大天使の日には、それぞれ500ターラーの前金を受け取った。第一巻の印刷がすぐに開始された。1月半ばには第二巻も印刷に回せる状態となった。エッカーマンは『ファウスト』に関する文章をいくつか挿入し、またゲーテの臨終の床の場面では、比類なく感動的で美しいラストシーンをこの幸福な数週間に書き足した。正書法や句読法に関しても厳しい点検が必要だった。というのも、あたかも全部ゲーテ自身が書いたかのようにだったからである。また『対話』は年ごとに分けて書かれているが、その各年の最後にできてしまう頁の空白を埋める必要が

あった。だから校正の際にはいろいろと書き加えた。日付もひどく混乱していて修正する必要があった。

自分のライフワークがようやく印刷される段階になって、エッカーマンは楽天的な気分をなくしていった。大公家の誕生日(2月2日または16日)⁽¹⁰⁾にこの本を完成するというのを、彼は出版者に叶ってもらえなかったからである。3月初めには彼はまた病気になってしまい、春が近づくにつれ、あらゆる肉体的な疾患が現れてきた。だがこれは、いつも味わう苦しみほどではなかった。彼はお金がなかったし、突然窮地に陥った友人オットーリエを助けることもできず、彼自身も再び借金暮らしとなって、しかも家具をいくつか古物商に持って行かねばならなかった。彼は『対話』の仏訳と英訳の販売を強く希望していたが、それももうまういかなかった。また最後の最後になって、『対話』のドイツ語版の行く手を、非常に腹立たしい競争相手が遮ってきた。フォン・ミュラー長官もゲーテとの対話録を推敲していて、それを発表しようとしていたのだ。長官は宮廷でその中からいくつか朗読したことがあったが、マリア・パヴロヴナは沢山の「目立った不首尾」⁽¹¹⁾を見て取り気分を害した。それが激しい議論に至るに及んで、長官は出版の延期を決定したのだった。

4月末に『対話』が出版され、喝采を博した。それは大公妃が期待していたものだった。5月16日には、ようやくライプツィヒから初めての印税が届いた。6月末、エッカーマンは医師の助言を受けてノルダーナイ島に赴いた。だがその前に彼にはすることが沢山あった。献本を贈ろうとしていたのだ。専門的な批評家達に狙いを定めて、出版社を支援することも忘れなかった。とりわけ重要なのはソレだった。ソレはスイスで最も影響力のある機関誌でこの本を宣伝するために、見本を翻訳してしようとしていた。また、翻訳の内容が信頼に足るものであることを証明するために、自分自身の日記のメモを手元に置いておこうとした。有難いことにソレは、非常に自尊心をくすぐるような論説をエッカーマンに提示した。というのも、どんなことがあっても決して明るみにはいけないことが、ソレの日記に書かれていたからである！ 日記によれば、1830年2月14日、ルイーゼ大公妃の死後すぐにゲーテの部屋に入ると、ゲーテがエッカーマンと食卓に就いて「自分の」ワイン一瓶を空にしようとしていたのだ。ゲーテは酔っていたようだ。非常に饒舌だったのだ！ ゲーテの家ではワインに高額な費用がかかっていたこと——1830年当時まだアウグストが生きていた——は十分噂になっていた。危うく口の悪い奴らに隙を見せちゃうところだ！ あの日、一瓶の共同のワインでなく、ワインを二本、またはそれ以上見たとソレは主張したが、それは全くの彼の思い違いだった。だからエッカーマンはすぐにジュネーブにいるソレに手紙を書いて、ゲーテがあの日午後ほんの少しだけワインを飲んでいただけと、ゲーテの「上機嫌で少し取ってつけたような気分」⁽¹²⁾は全く別のことに起因していることを詳しく説明した。ソレはすでにこの箇所を変更していた。その結果、ソレの論説には「ゲーテはエッカーマンと食卓に就いて、非常に饒舌に話していた」⁽¹³⁾という記述以外何も書かれなかった。お酒に

まつわるゲーテ関連の記述を避けようとする姿勢は、少しばかりエッカーマンには目立っているようである。エッカーマンが6年後に『対話』の第三巻用にソレの手記を利用した時には、気遣うことなくテーブルの上にワインを一瓶置いている。だが手元にあったソレのオリジナル原稿とは異なって、差し障りのない言い回りをを用いた。「ゲーテは一人の親友と食卓に就いていて、一瓶のワインを飲んでいた。」⁽¹⁴⁾ — 少なくとも一人に一つ割り当てられる「自分の」ワインではなく、「一瓶の」ワインとなっているのだ！

24. ディヒター 詩人

「あなたが成し遂げたことは計り知れないほど大きなことですし、あなたにとっても老師にとっても等しく名誉なことです。種が発芽し、大きくなって、予測もつかないほど繁殖することでしょう。」⁽¹⁵⁾ ファルンハーゲン・フォン・エンゼは『対話』に関してこのようにエッカーマンに書いている。彼の判断は同時代の批評家達と一致しており、この本の将来的な影響力を予言するものだった。事実この本の影響力は、予想を遥か超えた所に行きつくことになる。

だが時々、差し出された栄誉の酒杯に、苦汁が一滴混じることもあった。特に「若きドイツ派」の作家、例えばハインリヒ・ラウベは、ゲーテが「直接口にした」⁽¹⁶⁾「豪華な報告」であるのを認めつつも、「小エッカーマン」という添加物は全く意味のないものと見なした。というのも、エッカーマンの文学的な業績は、ほんの数人にしか認められていなかったからである。またハイネは『詩学論集』の著者エッカーマンに「ゲーテのオウム」⁽¹⁷⁾というあだ名を付けたが、そのような当てこすりは色々な所から聞こえてきた。自分の名前が実際に極めて優れた人達に口にされてはいるものの、自分の影響力が将来なくなることはない、という当然と言えば当然の自負心を、彼は口に出してはいけなかった。すでにゲーテの名前がそのことを示していたからである。だが彼は「ゲーテとの対話者」⁽¹⁸⁾であるだけでなく、文学という天空にかかる、自分自身で光り輝く星でありたかった。自分に対する嘲笑を止めなければ、それを自分で証明するしかなかった。1836年6月22日のファルンハーゲン宛の手紙の中で彼は「取るに足らない人物による馬鹿げたおしゃべり」⁽¹⁹⁾や、妬んで敵意を持つ人々が口にする「創造力の欠如」⁽²⁰⁾について、自らの心の内を吐露している。「記憶力と洞察力では生まれえない〈生命力〉を持った一冊を、私はどうやって創造力もなしに書けたというのでしょうか。」⁽²¹⁾ 彼がそう言うのは正しい。「さらに言えば、多くの人が思っている以上に私が取るに足らない人物であるならば、一体どうやってゲーテは私の精神を通過する際に自己を持ちこたえ、この本に相応しい尊厳と崇高さを維持することができたのでしょうか！ ある作家が様々な考えや見解を持ち、その能力と子ども委縮することなく表現できるのであれば、その作家は創造性も持っていると考えていいのではないのでしょうか。詩や散文を書くにしてもそれは同じです。創造力がなくても小さな詩集を書ける人だっています。一方で、最高の

創造力を持っていても、前書きや論文以外何も書けない人もいますのです。肝心なことは、生み出されたものが生命力を持ち、そこから影響力が生まれてくるということなのです。また量ではなく質も肝心です。バランジェはこれまで小詩集を二三冊出した他は何も書いていません。ビュルガーやヘルティエーも同じです。ですが、〈あいつらは創造的ではなかった!〉と言う人がいたでしょうか。』⁽²²⁾

エッカーマンの対話録は、話されたことを忠実に再現する録音レコードの自動機能ではない。それについては、こんにちも疑いようがない。また彼が上述の手紙で、創造的な能力について語っていたことも、全くもって正しい。だが彼に命取りとなったのは、功名心に駆られて自分を独り立ちした詩人^{ディセター}と見なし、創造力を持った人物に見せようとしたことだった。またそれは彼の人生最大の幻滅となるものだった。彼は自分の創造力の偏狭さを自覚していなかったのだ。

エッカーマンが1823年に書いた青年時代の詩について、ゲーテはどのように考えていたのだろうか。ゲーテはそれについてははっきりと述べていない。だが、ゲーテがエッカーマンに詩を書くように鼓舞し、不幸な結末に終わったバイエルン王への献呈詩の時のように、称賛を惜しまなかったことは確かである。もちろん、そうした報告は大抵エッカーマン自身によるもので、『対話』や手紙で述べられている。例えば1829年4月21日にエッカーマンがアウグステ・クラーツィヒに述べているのは、彼女との第二の恋を経験して、自分がこれまで到達したことのない高みに立つ詩人であるように感じていることである。またゲーテの所でドレスデンから戻って来たフォン・ミュラー長官に会った時、ルートヴィヒ・ティークがある大きな集まりでエッカーマンの最新の詩を二度も朗読してくれたことを長官が報告してくれたことも、上記の手紙に記されている。この最新の詩とは「予感」という風刺詩のことで、この中でエッカーマンはワイマルの貴族階級を少々「からかって」、「名前というきんきら飾り」⁽²³⁾を絶えず鼻にかけているよりは、むしろ功績を立てて傑出した方が良く、という安っぽい忠告をしたのである。この詩の写しがどうやらドレスデンに迷い込んだようで、長官が断言したところによれば、ティークはこれを「近代の最上の詩の一つ」と解説したそうである。「これを私は平然と受け入れました」とエッカーマンの手紙に書いている。「そしてその間、私はゲーテと楽しげな視線を交わしました。ですが心中嬉しく思いました。また私にとって目立った出来事と言えば、私の詩作がこの冬に著しく進歩した、と二三日前にゲーテが言ってくれたことでした。しかし私はゲーテにこれまでたった一つの詩も見せていませんでした。長官が話したことや、第三者を通じて手に入ったのかもしれない詩を指して、そう言ってくれたに違いありません。』⁽²⁴⁾ゲーテの家に入りする家族ぐるみ友人は、ほとんど変装した詩人であった。だから彼らのディレッタンティズムにむきになることがあったとしても、彼は皆の機嫌を損ねないよう見て見ぬふりをした。

こうして月日が経つうちに、エッカーマンの書類には詩が沢山溜まっていった。1823年に書いた詩で立派な冊子ができるほどだった。大公妃は詩集を出版するよう励ましてさえくれた。

1836/37年には詩を綴った紙片を整理して、火曜日の夕方（2月5日と19日）、城で詩を朗読する榮譽を享受した。彼は少し前からマリア・パヴロヴナの司書に昇進していて、手に入れたばかりの名誉に少しばかりいい気になっていた。だからブロックハウスが自分の詩集を出版してくれることになった時にも、印刷部数がたった1200部で店頭価格が1.5ターラーだったにも関わらず、ブロックハウスから600ターラーを下らない報酬を要求したのだった！ 彼はこう述べている。「私がこの国の出身で、だからこそ私の詩にある種の真実味や、ある種の自然な本質が現れていると言われていています。私がそういった境遇にあることも、早期の売りに好都合だと言えるでしょう。こうした本質がなければ、いくらか人気を得ようとしても無駄なことでしょう。」⁽²⁵⁾ ブロックハウス社は出来の悪くない詩集をこれまで沢山出してきたが、「信じられないほど僅かな成果」⁽²⁶⁾ しか上げられなかった。そのような苦い経験をしてきたこともあって、エッカーマンの本を委託という形でのみ引き受けようとした。つまり、印刷費は立て替えるが通例の業務経費は請求し、さらに売上金をすべて出版社に譲渡する、というものであった。確かに無担保で費用を出すということにしてしまえば、『対話』の収支計算書に借方の記帳をしてしまうことになるだろう。「この企画が必ず成功を収める」⁽²⁷⁾ ためにも、そして新しく書き始めたいいくつかの詩や、その他の比較的多くある「古い断片」⁽²⁸⁾ を完成させるためにも、エッカーマンは自分の書いたものをもう一度「厳しい批判という試練」⁽²⁹⁾ にかけてみようとした。そのために気分を落ち着けようとして、彼は5月に——その前に彼自身はインフルエンザに罹ってしまい、幼い息子も5週間にわたって神経熱で寝たきりになっていた——エアフルトに向った。彼はその地で、これまで何度も言及してきた哀歌「諦め」を仕上げた。それはアウグステ・クラーツィヒとの哀しい思い出を綴ったものである。この冬からライプツィヒで暮らしていたオットー・フォン・ゲーテが、7月、ブロックハウスとの間に入ってくれた。だが彼女の仲介以上に効果的だったのは、『対話』の第三巻を予定しているというエッカーマンの灰めかしだった。この出版者も第三巻に大いに興味を示した。だからブロックハウスとしては「非常に楽しんで」⁽³⁰⁾ 読んだエッカーマンの詩を受け入れるしかなかった。だが支払ったのはたった300ターラーで、そのうち100ターラーは差し当たり『対話』の前払いとした。『対話』の売上げは、その文学的な偉業にも関わらず、出版年でもたった946部しかなかった。1837年8月の最初の決算では、以前の前払いを差し引いて260ターラーしかもらえなかった。エッカーマンは失望し思い悩んだ。

だが彼の原稿には、依然として一つの欠落が一つあった。「故郷」（第29章参照）という詩がまだ断片のままだったのだ。夏の間ずっと「国民ゲーテ」に取り組んでいたのも、この詩が完成したのはようやく1838年2月になってからのことだった。そうこうするうちに詩集の印刷がすでに始まっていたので「故郷」を書き終えねばならなかったが、個人的な色合いが強いために、この詩は最もよい場所に配置された。3月末、ようやく『詩集』が出版された。エッカーマンは文筆家達と活発に文通を始めた。彼らとは『対話』を通じて知り合いになっていたし、アポロの兄弟

として彼らに挨拶しておいてもよいだろうと考えたからである。ファルンハーゲン、インマーマン、フライリヒラート、O・F・グルッペやその他の文筆家になら自分の「真実を求める努力」⁽³¹⁾は共感を呼び起こすに違いない、そう彼は期待したのであった。

いくら楽観的でなければ、作家というものは決して自分の詩集を世に出さないものだが、実際にエッカーマンはそういった楽観性を持ち合わせていた。それだけに、彼はどれほど失望したことだろう！ 数名の友人から好意的な返事もらったが、彼らもこの本に対する公的な判断を言わないよう注意していた。批判的な論評から聞こえてくるものと言えば、「全く不快極まる」⁽³²⁾ものだった。それらの中で最も酷かったのは、エッカーマンの本について『ハレ年鑑』の中でアーノルド・ルーゲが述べた言葉である。ルーゲはこの本を「ありきたりな散文」⁽³³⁾を言ったのだ。哲学者、政治家、革命家でもあったルーゲにとって、老ゲーテや彼の一派がお気楽に威張りちらすのは我慢ならないことだった。誹謗中傷を受けたこの本を擁護してくれたのは、オーストリアの作家エルンスト・フォン・フォイヒターズレーベンただ一人だった。そういうわけで、この『詩集』の売り上げはひどいものだった。1841年、いまだ奇跡を信じているエッカーマンが、『詩集』を全面改稿し新版を出すことを提案した時、ブロックハウスはこう答えざるを得なかった。私が最も危惧することに比べたら、この本の成功など大したことではありません。儲けはいつでもよいのです。「実際に沢山の素晴らしいものがこの中に含まれている」⁽³⁴⁾からこそ、私はただこの本を出版したのです、と。

「沢山の素晴らしいもの」—— こうした高い評価もエッカーマンを救うのに十分でなかった。およそあの時代に評価されるには、もみ殻の下に小麦はあまりに詰まっていなかったのだ。叙情詩を作る才能という点で、1841年という年は1837/38年と同じくらい人材豊富だった。アイヒェンドルフやメリケが詩を書いて有名になっていたし、フライリヒラートはこれまでない成功を取っていた。レーナウは名声の頂点にあった。〈青年ドイツ派〉でさえ、エッカーマンの無邪気な牧歌に気の毒そうに微笑みかけた。エッカーマンの書いたものは過去の色褪せた残響だったのだ。エッカーマンの臆病な恋愛叙情詩が諦めの境地の中で徐々に力を失っていくのに対し、ジョルジュ・サンドの小説によって掘り起こされたこの世代は、諦めに向かって突撃していた。だが、諦めというモチーフこそ「小エッカーマン」の最上のものであり、彼の内側から情熱的に溢れ出ているものである。詩集で用いられている言葉は、実に簡潔でありながらも感動的で、詩行がうまく結びついて豊かな響きを生み出している。哀愁の響きはハンヒェンに宛てた詩でも感じ取れるが、ほとんどはアウグステに宛てた詩に見られるものである。特にそれは、この詩集を締め括る最後の三つの詩「諦め」「願いと充溢」「故郷」に見て取ることができる。エッカーマン自身誇らしげに言っているように、彼は確かに庶民の子供であり、低地ドイツの農夫の息子であるが、彼が元来持っている能力はあまりに乏しいものだった。だから彼は未知の作品から受けた印象に圧倒されてしまい、抜群の適応能力もあって、すっかりその印象に飲み込まれてしまった。人物

に寄せた詩、韻文体で書かれた格言及び省察に、それが最も痛々しく現れている。ゲーテという模範に倣って「機会詩」を書こうとする時も、例えば猟師の歌や「ヘルゴラントの漁師の歌」はある種のリアリズムで書かれているものの、全くもって味気ないものとなっている。だが彼にはのんびりとした低地ドイツのユーモアがあって、「魅力的なザール川の人魚」や「制服を着た七人の少女に寄す」のようないくつかの機会詩では、そういったユーモアが発揮されている。それはゲーテという高貴な人物の周りにいたら、おそらく滅多に出てこなかったものだろう。

1838年の詩集の失敗は、エッカーマンの今後の人生と創作にとって極めて重大な影響を及ぼした。彼のワイマルでの地位を揺るがしただけでなく、その他のいくつかの計画も駄目にしてしまった。独立した作家としてのキャリアを歩み始めようと思っていた1834年の夏には、それらの計画で頭が一杯だったのだが、色彩論に関する論文や『ファウスト』第二部の注釈と同じように、前々から予定していた『論集』第二巻も頓挫してしまった。彼の文学的な貸借対照表の中で唯一の借方項目は格言集であった。1828年には『モルゲンブラット』に「その他諸々」が、1829年には『混沌』に「人生の後に」が掲載された。また1843年には『ティートゲ財団のアルバム』に「金言と意見」が掲載された。それらはエッカーマンに驚くべき成功をもたらした。ラウベは1837年の『旅行小説集』の中で「小エッカーマン」がまだ独り立ちできていないと上から目線で語っていたが、エッカーマンの格言に心を動かされ、彼を援助しようとした。ラウベは次のように述べている。「極めて健全な世界で判断力を身に付けて、独自性あるものへと変貌を遂げていった人物こそが自分の人生を十分に利用したのですし、そうした人物であれば、味気ない意見が自分の傍らを呑気に過ぎ去っていくのを許さないものです。私はいつも『ゲーテとの対話』を我々の文学の中で最上のものと見なしてきましたが、この本のためにもエッカーマンに認めなくてはならないのは、彼が以前よりもずっと一人前の人物となって、感謝されるに値する人物へ変貌を遂げたということです。私は彼のことを、自分自身の言葉によって再現する能力を持つ、極めて注目すべき作家と見なさなないわけにはいきません。」⁽³⁵⁾ この賞賛の言葉は遅かった——エッカーマンには遅すぎたのだ！

本稿はH. H. Houben: *Goethes Eckermann. Die Lebensgeschichte eines bescheidenen Menschen.* Berlin / Wien / Leipzig (Paul Zsolnay) 1934の第23章と第24章を訳出したものである。第22章までは以下を参照のこと。

林久博：「翻訳：H. H. ホウベン『ゲーテのエッカーマン——ある控え目な人間の伝記』（5）」、『文化科学研究』第33巻通巻第54号、中京大学文化科学研究所、2022年、25～63頁。

なお今回から著者氏名 Houben の日本語表記を「フーベン」と改めた。Brockhaus Enzyklopädie

に著者 Houben に関する解説があり、それによると一般的なドイツ語発音規則とは異なり、[h'u:bən] と発音することが判明したためである。

Brockhaus Enzyklopädie in 20 Bänden. Bd. 8 (H-IK) F. A. Brockhaus (Wiesbaden) 1969, S. 698.
(Artikel: Houben, Heinrich Hubert)

注

- (1) Houben, Heinrich Hubert: *J. P. Eckermann. Sein Leben für Goethe. Nach seinen neu aufgefundenen Tagebüchern und Briefen dargestellt*. Teil 2. Hildesheim (Dr. H. A. Gerstenberg) 1975, S. 108. (Carlyle an Eckermann [6. 5. 1834])
- (2) Ebd., S. 110. [Eckermann an Ottilie (18. 9. 1834)]
- (3) Ebd.
- (4) Ebd.
- (5) Ebd., S. 112. [Eckermann an Riemer (? . 9. 1834)]
- (6) 1836/37年, コッタ社から出版された Goethes poetische und prosaische Werke のことを指している。Vgl. *Weimar Lexikon zur Stadtgeschichte*. Hrsg. von Gitta Günther, Wofram Huschuke und Walter Steiner. Weimar (Hermann Böhlau Nachfolger) 1993, S. 98. (Artikel: Eckermann, Johann Peter)
- (7) Houben, a. a. O., S. 99f. [Kanzler von Müller an Varnhagen (20. 4. 1835)]
- (8) Ebd., a. a. O., S. 102. [Eckermann an Wilhelm Bertram (18. 9. 1835)]
- (9) Goethe: *Werke*. Hrsg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. I. Abtheilung. 2. Band. Weimar (Hermann Böhlau Nachfolger) 1901, S. 291. [Fürstenregel] (Reprint: Sansyusya)
- (10) ワイマル大公カール・フリードリヒの誕生日は2月2日, 大公妃マリア・パヴロヴナの誕生日が2月16日。
- (11) Houben, a. a. O., S. 139. [Kanzler von Müllers Tagebuch (3. 4. 1836)]
- (12) Ebd., S. 146. [Eckermann an Soret (26. 5. 1836)]
- (13) Ebd., S. 148. [„Bibliothèque universelle“ im Juli 1836]
- (14) Eckermann, Johann Peter: *Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens 1823-1832*. Berlin (Deutscher Klassiker Verlag) 2011, S. 694.
- (15) Houben, a. a. O., S. 154. [Varnhagen an Eckermann (20. 5. 1836)]
- (16) Ebd., S. 168. [Laube an Varnhagen (28. 7. 1838)]
- (17) ハイネは『ミュンヘンからジェノヴァへの旅』の中で次のように述べている。「実際、緑色の羽根がエックマン氏の頭に生えていないのは創造の失敗であり、ゲーテは彼にイエーナ大学の博士帽を贈与して、自らの手でその帽子を被せることで、少なくともこの欠陥を埋め合わせたのだ。」この「緑色の羽根」が〈オウム〉を意味しているのは言うまでもない。
Heine: *Reise von München nach Genua*. In: *Werke in 5 Bänden*. 3. Band. Berlin / Weimar (Aufbau) 1968, S. 205.
- (18) Houben, a. a. O., S. 414. [Freiligrath an ? (24. 4. 1838)]
- (19) Ebd., S. 171. [Eckermann an Varnhagen (22. 6. 1836)]
- (20) Ebd.
- (21) Ebd.
- (22) Ebd.
- (23) Eckermann, Johann Peter: *Gedichte*. Leipzig (Brockhaus) 1838, S. 82.
[https://books.google.de/books?id=KfcKAQAIAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false]
- (24) Petersen, Julius (Hrsg.) : *Eckermanns Briefe an Auguste Kladzig*. In: *Jahrbuch der Sammlung Kippenberg*. Bd. 4. Leipzig (Insel) 1924, S. 123.
[<http://www.goethezeitportal.de/infocenter/goethemuseum/goethe-museum-duesseldorf/schaetze-aus-dem-goethemuseum/jahrbuch-kippenberg/band-4/band-4-blatt-010.html>]

- (25) Houben, a. a. O., S. 187. [Eckermann an Brockhaus (28. 1. 1837)]
- (26) Ebd., S. 189. [Brockhaus an Eckermann (18. 2. 1837)]
- (27) Ebd., S. 190. [Eckermann an Brockhaus (19. 4. 1837)]
- (28) Ebd.
- (29) Ebd.
- (30) Ebd., S. 195. [Brockhaus an Eckermann (28. 8. 1837)]
- (31) Ebd., S. 199. [Eckermann an O. F. Gruppe (6. 4. 1838)]
- (32) Ebd., S. 207. [„Hallische Jahrbücher“ Nr. 109 (7. 5. 1838)]
- (33) Ebd.
- (34) Ebd., S. 208. [Brockhaus an Eckermann (10. 6. 1841)]
- (35) Ebd., S. 215. [„Zeitung für die elegante Welt“ Nr. 6 (7. 2. 1844)]
次の URL でも閲覧可 [<https://opacplus.bsb-muenchen.de/Vta2/bsb10532441/bsb:9389596?page=7>]